

し し が はな 獅子ヶ鼻湿原希少個体群保護林

面積	計： 26.11ha （由利森林管理署）
設定目的（管理方針書より抜粋）	<u>鳥海山の噴火活動等によって形成された「出壺（でつぼ）」と呼ばれる湧水地があり、この出壺から出る豊富な湧水により涵養されて成立した湿地帯と周囲のブナ林によって構成された、独特の景観をなす湿原になっている。この湧水は、水温・水量とも年間を通して一定に保たれており、人為の影響をほとんど受けることなく植生が遷移しているため、多様な水生・湿原植物が生育している。特に、流水中及びその周辺には大量のコケ類が見られ、その生育状況は、本邦の他地域には類例が見られないものである上、希少種が確認されているなど、植物相が豊富な点でも学術上極めて価値が高いものとなっている。この獅子ヶ鼻湿原の水生・湿原植物の保護を目的とする。</u>
前回調査の評価・課題等	林相等に大きな変化は確認されなかったが、保護林内でナラ枯れが発生しており、継続してナラ枯れ被害に対応した保護・管理が必要である。
モニタリングの実施間隔	5 年

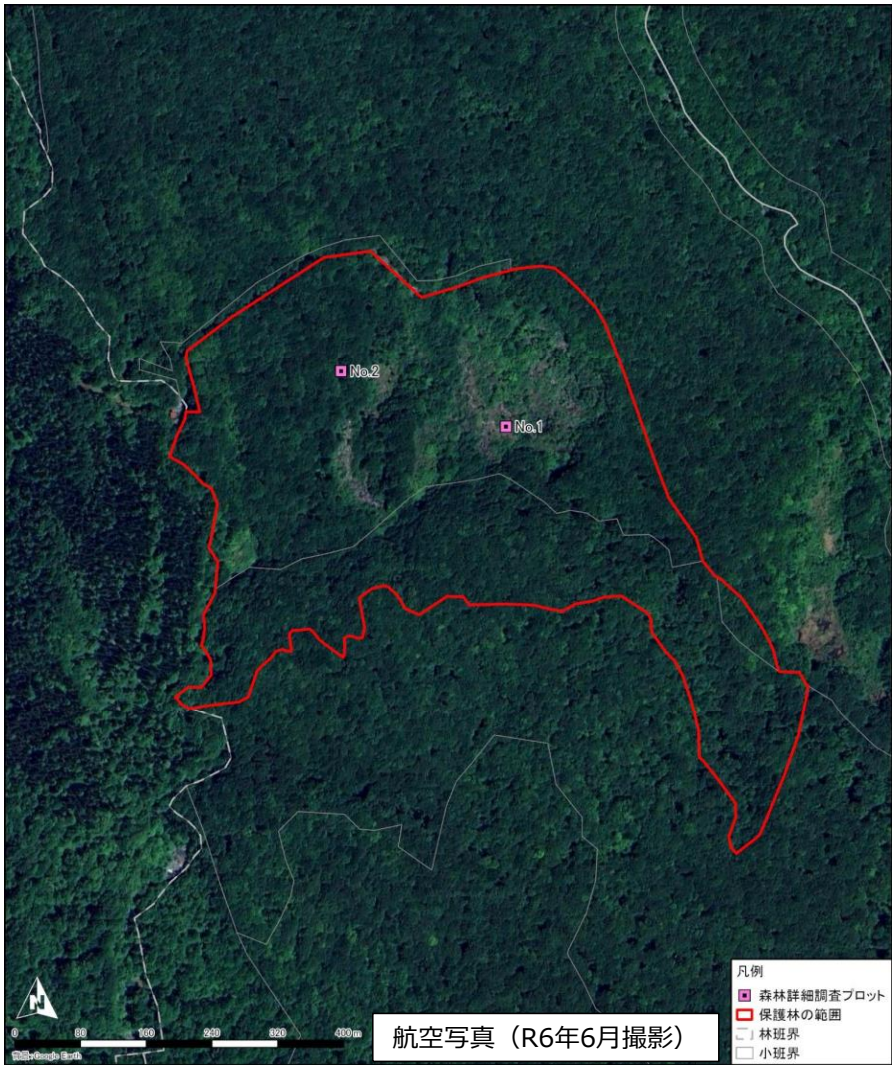
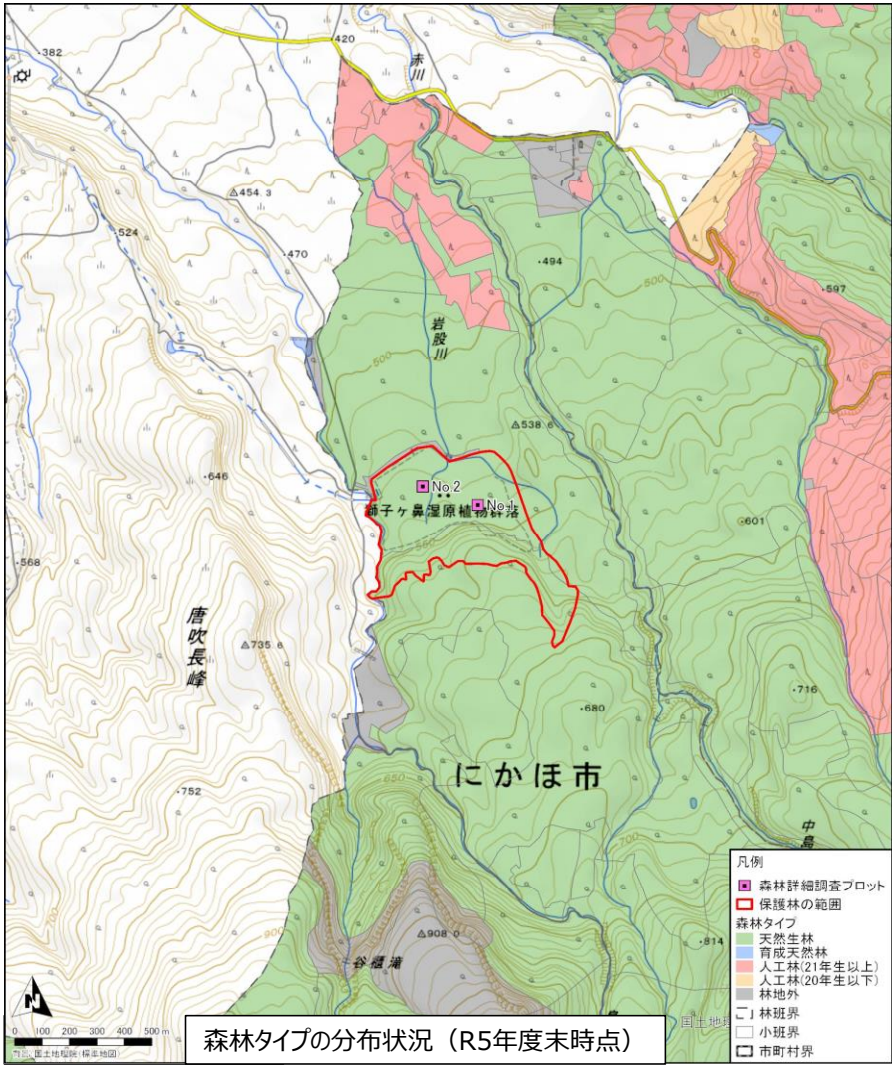
獅子ヶ鼻湿原希少個体群保護林

実施した調査 資料調査、森林詳細調査(2箇所)

デザイン

鳥海山の噴火活動等によって形成された湧水地から出る豊富な湧水により涵養されて成立した湿地帯と周囲のブナ林によって構成された、独特の景観をなす湿原になっている。

本保護林内及び周辺の森林タイプの分布に変化は確認されなかった。



デザイン 森林詳細調査

・プロット1は湧水からの流路が網目状に発達した湿原内に位置し、プロット2はブナが主として林冠を構成している。
・両プロットとも林相に大きな変化は見られない。

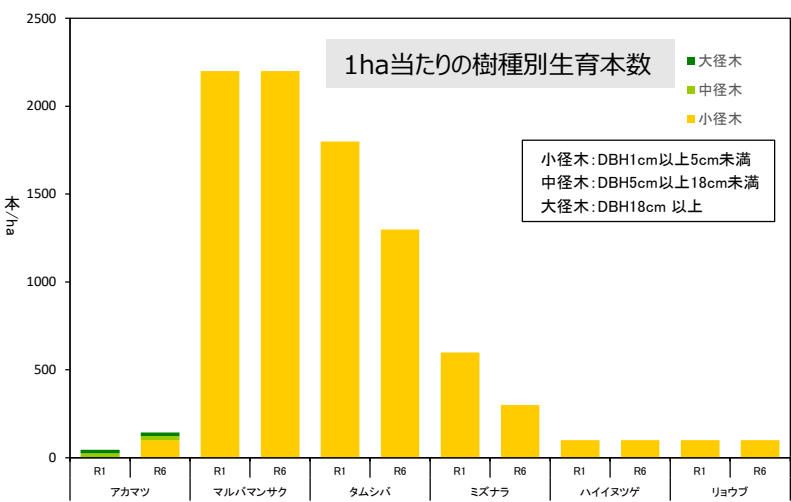
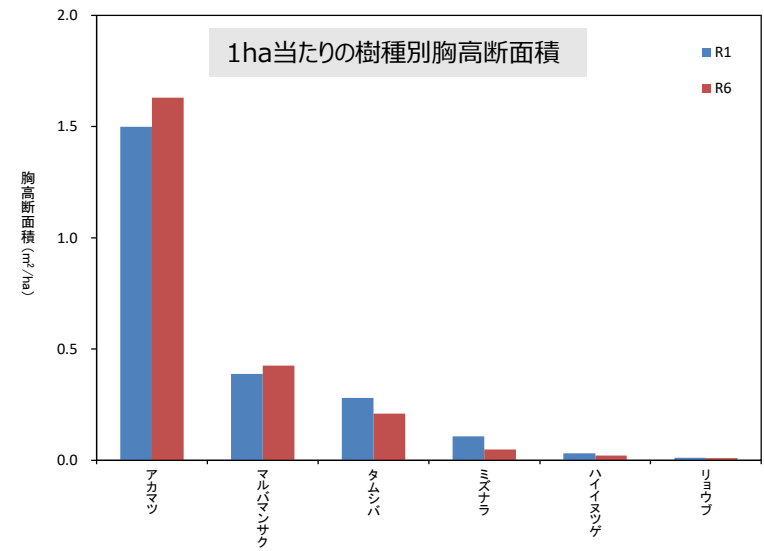
【プロットNo.1】

	R1(10月16日)	R6(9月10日)	比較結果等
磁北方向			大きな変化はない。
磁東方向			大きな変化はない。
磁南方向			大きな変化はない。
磁西方向			大きな変化はない。
天頂			大きな変化はない。

【プロットNo.2】

	R1(10月15日)	R6(9月9日)	比較結果等
磁北方向			大きな変化はない。 (R1で手前に見える枯損木はR6では倒伏した後)
磁東方向			大きな変化はない。
磁南方向			大きな変化はない。
磁西方向			大きな変化はない。
天頂			大きな変化はない。

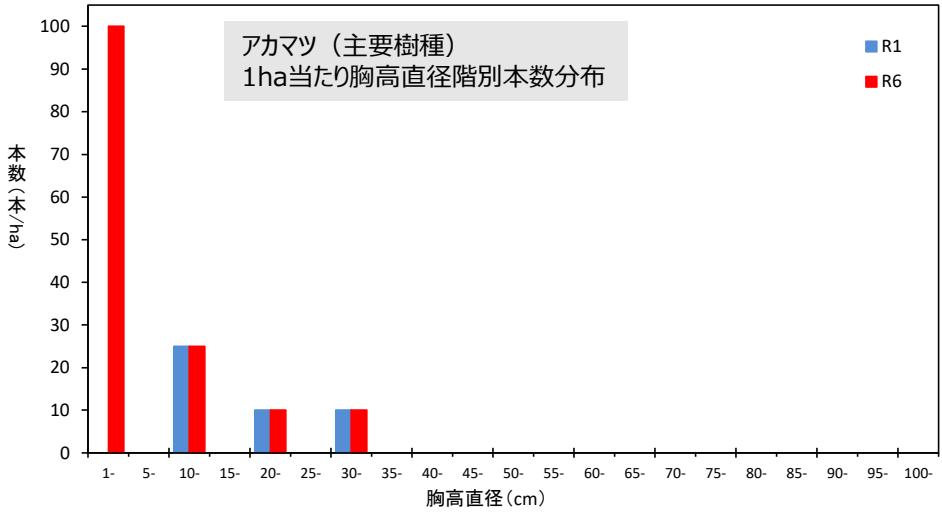
デザイン 森林詳細調査 【プロットNo.1】



1ha当たりの樹種別平均胸高直径・胸高断面積・胸高断面積割合

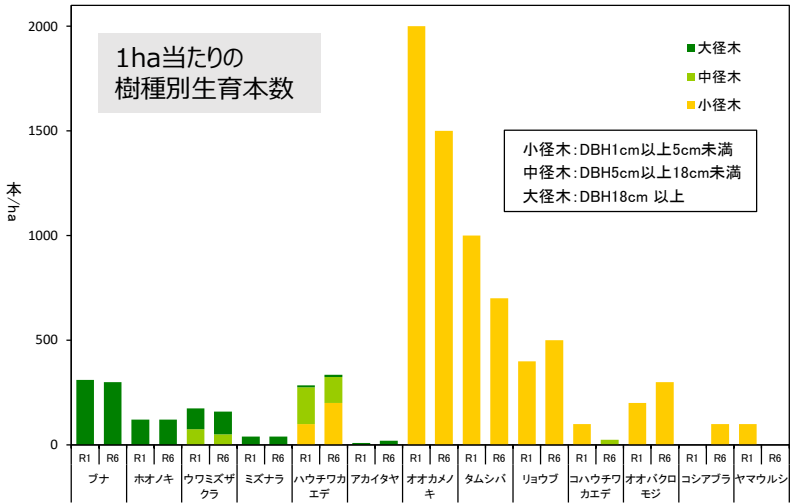
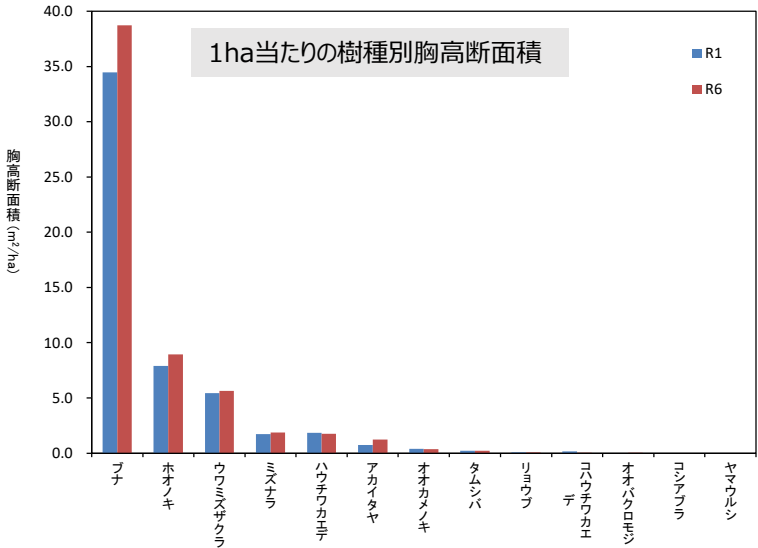
樹種	平均胸高直径(cm)		胸高断面積(m ² /ha)		胸高断面積割合	
	R1	R6	R1	R6	R1	R6
アカマツ	18.4	7.0	1.50	1.63	64.7%	69.6%
マルバマンサク	1.5	1.5	0.39	0.43	16.7%	18.2%
タムシバ	1.4	1.4	0.28	0.21	12.1%	8.9%
ミズナラ	1.5	1.4	0.11	0.05	4.7%	2.1%
ハイイヌツゲ	2.0	1.6	0.03	0.02	1.4%	0.9%
リョウブ	1.2	1.1	0.01	0.01	0.5%	0.4%
6種			2.32	2.34	100.0%	100.0%

※緑セルは主要樹種を示す。



- ・樹木の生育状況に目立った変化は見られなかった。
- ・大径木及び中径木が唯一存在する主要樹種であるアカマツが胸高断面積の約7割を占めるほか、小径木が新たに確認された。
- ・アカマツの胸高直径階に進階は確認されなかった。
- ・低木層にはマルバマンサクやタムシバの小径木が多く生育していた。

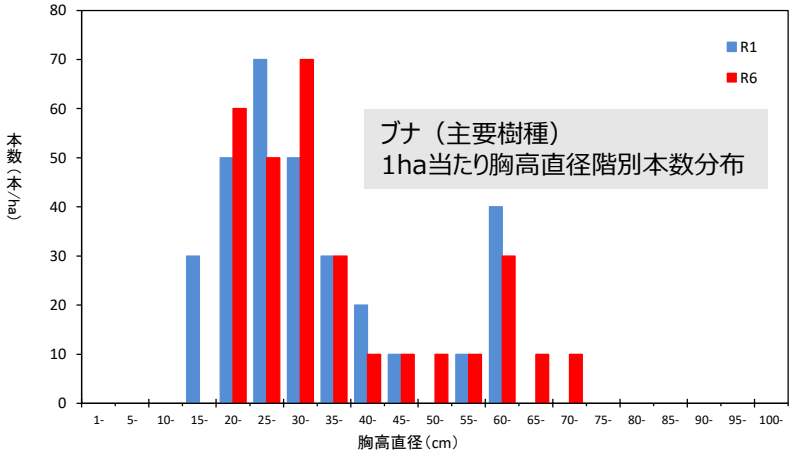
デザイン 森林詳細調査 【プロットNo.2】



1ha当たりの樹種別平均
胸高直径・胸高断面面積・
胸高断面面積割合

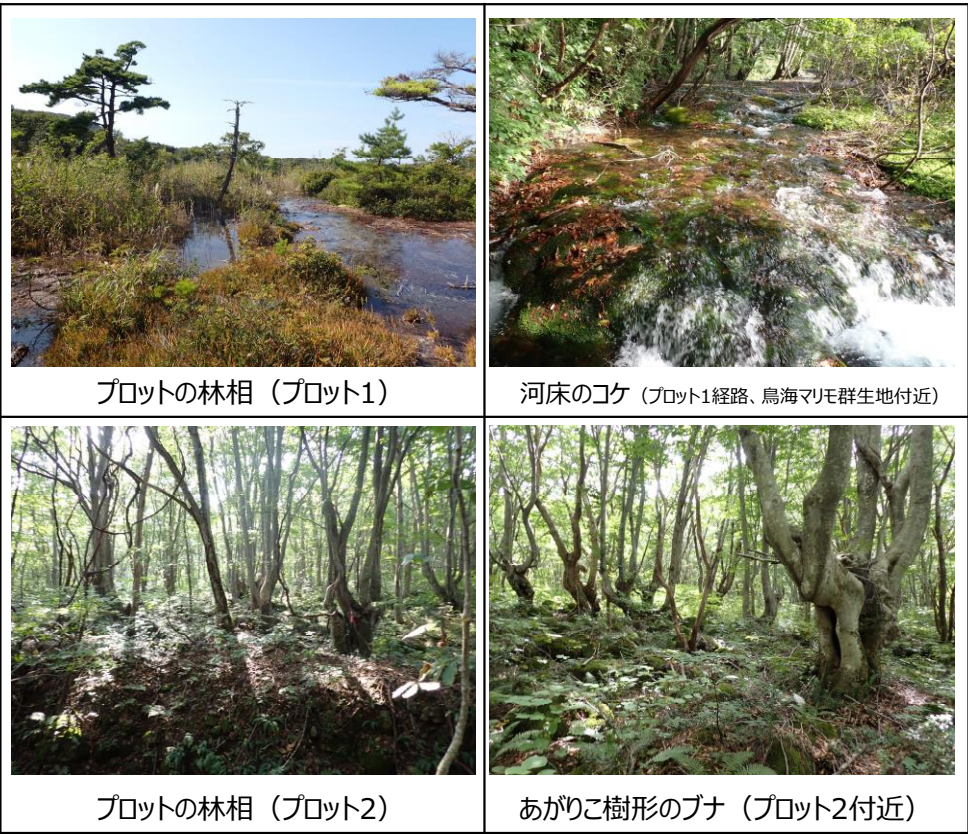
樹種	平均胸高直径(cm)		胸高断面面積(m ² /ha)		胸高断面面積割合	
	R1	R6	R1	R6	R1	R6
ブナ	35.0	37.6	34.46	38.73	65.0%	65.7%
ホオノキ	28.0	29.9	7.91	8.94	14.9%	15.2%
ウミズザクラ	19.4	20.8	5.43	5.64	10.2%	9.6%
ミズナラ	23.0	24.1	1.72	1.87	3.2%	3.2%
ハウチワカエデ	7.9	6.4	1.84	1.75	3.5%	3.0%
アカイトヤ	30.7	27.7	0.74	1.23	1.4%	2.1%
オオカメノキ	1.5	1.6	0.39	0.36	0.7%	0.6%
タムシバ	1.6	1.9	0.21	0.23	0.4%	0.4%
リョウブ	1.5	1.4	0.07	0.09	0.1%	0.2%
コハウチワカエデ	4.8	5.2	0.18	0.05	0.3%	0.1%
オオバクロモジ	1.4	1.3	0.03	0.04	0.1%	0.1%
コシアブラ		1.8		0.03		0.0%
ヤマウルシ	1.4		0.02		0.0%	
13種			53.00	58.96	100.0%	100.0%

※緑セルは主要樹種を示す。



- ・樹木の生育状況に目立った変化は見られなかった。
- ・主要樹種であるブナの胸高断面面積は増加し、胸高直径階の進階が確認され、胸高断面面積割合では約65%を占めた。
- ・高木層、亜高木層のブナ、ホオノキ、ミズナラ、アカイトヤは全て大径木であった。
- ・低木層はオオカメノキ、タムシバ、リョウブ、オオバクロモジ等が確認された。

デザイン



デザインに関する評価

基準	指標	結果
希少な野生生物の生育・生息地及び個体群の存続に必要な更新適地等が維持されている	希少個体群の生息・生育環境となる森林の状況、森林の被害状況	森林タイプの分布に大きな変化は確認されなかった。
		湿原の状況に大きな変化は確認されなかった。
		下層植生の生育状況に目立った変化は見られなかった。
		目立った森林被害は確認されず、前回調査で確認されたナラ枯れも見られなかった。

価値 森林詳細調査 下層植生調査結果

【プロットNo.1】

年度	R1		R6	
調査区	E区	W区	E区	W区
低木層の植被率(%)	70	70	30	70
低木層の優占種	ミズナラ	リョウブ	タムシバ	マルバマンサク
草本層の植被率(%)	70	70	90	50
草本層の優占種	ハイヌツゲ	ハイヌツゲ	キンコウカ	ハイヌツゲ

出現種数	15	11	14	14	環境省RL	秋田県RL
アカマツ		○	○	○		
アキノキリンソウ	○					
ウラボシ	○		○	○		
カラスシキミ	○	○				
キンコウカ	○	○	○	○		
コケ類	○	○	○			
コマユミ	○					
ショウジョウバカマ	○			○		
ススキ				○		
ゼンマイ	○		○	○		
タムシバ	○		○			
ツルシキミ	○		○			
ノリウツギ			○			
ハイヌツゲ	○	○	○	○		
ハコヤナギ			○			
ホトツジ		○		○		
マルバマンサク	○	○	○	○		
ミズナラ	○	○	○	○		
ヤマウルシ		○		○		
ヤマドリゼンマイ						
ヨシ	○	○	○	○		
リョウブ	○	○	○	○		

【プロットNo.2】

年度	R1		R6	
調査区	N区	S区	N区	S区
低木層の植被率(%)	40	60	80	20
低木層の優占種	タムシバ	ハウチワカエデ	オオカメノキ	オオカメノキ
草本層の植被率(%)	80	70	20	90
草本層の優占種	オオカメノキ	オオカメノキ	オオカメノキ	ヒメモチ

出現種数	12	13	14	14	環境省RL	秋田県RL
アオダモ	○	○	○	○		
ウリハダカエデ				○		
ウツミズザクラ	○		○	○		
エゾユズリハ	○	○				
オオカメノキ	○	○	○	○		
オオバクロモジ	○	○	○			
コシアブラ	○			○		
コマユミ						
サワフタギ	○	○		○		
シシガシラ			○			
ゼンマイ			○			
タムシバ	○	○	○	○		
ツクバネソウ	○		○			
ツルシキミ		○				
ツルリンドウ	○					
ナナカマド	○					
ノリウツギ		○	○	○		
ハイヌツゲ	○	○	○	○		
ハウチワカエデ		○		○		
ヒメモチ				○		
ブナ	○	○	○	○		
ミヤマガマズミ		○				
ヤマウルシ			○	○		
ヤマソデツ		○	○	○		
リョウブ		○	○	○		



プロット1(E区)



プロット1(W区)



プロット2(N区)



プロット2(S区)

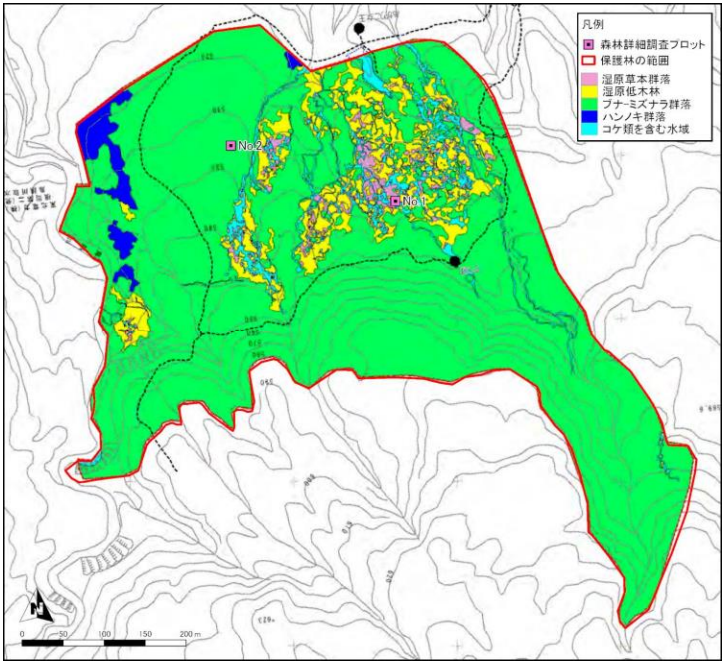
- ・下層植生の生育状況に目立った変化は見られなかった。
- ・絶滅危惧種等の重要種は確認されなかった。

価値

病虫・鳥獣・気象害の発生状況

項目	結果
病虫害	記録なし（前回調査ではミズナラのナラ枯れ）
鳥獣害	記録なし
気象害	記録なし

植生図
R3年調査
にかほ市教育委員会



・ブナ・ミズナラ群落が広面積を占める中、保護林範囲北側には新山溶岩流末端崖からの湧水による流路網が形成され、その周辺に湿原草本群落や湿原低木林が分布。

湿原の状況



- ・湿地の中に胸高直径20～30cm程度のアカマツが疎らに生育しており、キンコウカ、ヨシ、モウセンゴケ、ショウジョウバカマなどの湿生植物が生育していた。過年度調査結果との比較では、立木本数及び平均胸高直径等に大きな変化は見られなかった。
- ・植生分布に大きな変化は見られず、流路は豊富な水量を維持していた。

価値に関する評価

基準	指標	結果
保護対象とする希少な野生生物が健全に生育・生息している	保護対象とする希少な野生生物の生育・生息状況	・湿原の植生に目立った変化は見られなかった。

利活用

利活用に関する評価		
基準	指標	結果
森林施業・管理技術の発展、 学術の研究等に利用されている	学術研究での利用	獅子ヶ鼻湿原における植物群落や湧水群に関する学術研究等への利用が1件確認された。

管理体制

- ・由利森林管理署
にかほ市主体の獅子ヶ鼻湿原保存活用計画策定委員会において、モニタリング調査を実施している。木道等については、にかほ市が由利森林管理署との契約に基づき管理している。
- ・にかほ市役所
にかほ市観光課で4月から11月末まで管理人（会計年度職員）を置き、巡視を実施している。木道の点検や危険木の確認などを行っている。

管理体制に関する評価		
基準	指標	結果
適切な管理体制が整備されている	保護林における事業・取組実績、巡視状況等	必要な管理体制が取られている。

総括表【プロット1】

調査年度		R1	R6
調査日		2019/10/16	2024/9/10
プロット情報	斜面方位、傾斜(平均)	NW、8°	
	局所地形	山脚堆積面	
林分状況	段階	老齢	老齢
	【高木層】主要構成樹種	アカマツ	アカマツ
	【高木層】植被率	5%	5%
	【高木層】樹高	5～8m	5～8m
	【高木層】DBH	10～30cm	10～30cm
	【草本層】優占種	ハイイヌツゲ	キンコウカ、ハイイヌツゲ
	【草本層】植被率	70%	50～90%
林分等の状況		湿原の中にアカマツが疎らに生育しており、下層には多様な湿生植物が確認された。特に流水中やその周辺には大量のコケ類が見られた。 湿原の面積に大きな変化は見られず、豊富な水量を維持していた。	
林況写真			

現地調査結果総括・考察【プロット1】

- ・高木層が疎らであり、点在するアカマツが胸高断面積割合の約7割を占める。
- ・その他はマルバマンサク等の低木林や湿生草地、湧水からの流路が分布する湿原の景観を呈する。
- ・林況に大きな変化はなく、下層植生のキンコウカ、ヨシ、ショウジョウバカマ等の湿生植物や、コケ類が生育しており、林床における環境も前回調査時から大きな変化はないと考えられる。
- ・プロット内や到達経路周辺の流路は豊富な水量を維持しており、流水中やその周辺には大量のコケ類が見られ、非常に貴重な湿原であると考えられる。

総括表【プロット2】

調査年度		R1	R6
調査日		2019/10/15-16	2024/9/9-10
プロット情報	斜面方位、傾斜(平均)	N、8°	
	局所地形	山腹凹斜面	
林分状況	段階	老齢	老齢
	【高木層】主要構成樹種	ブナ	ブナ
	【高木層】植被率	80%	80%
	【高木層】樹高	20～26m	20～23m
	【高木層】DBH	40～60cm	40～70cm
	【草本層】優占種	オオカメノキ	オオカメノキ、ヒメモチ
		【草本層】植被率	40～60%
林分等の状況		ブナが主として林冠を構成しており、林相に大きな変化はなく、順調な生育が確認された。 ただしプロットの周辺樹林においてミズナラのナラ枯れが確認された。	
林況写真			

現地調査結果総括・考察【プロット2】

・ブナが主として林冠を構成しており、薪炭利用により伐採が行われていた天然生林と考えられ、プロット内や到達経路周辺には地上数mで幹が分岐したあがりこ樹形を呈するブナが多く存在し、貴重な森林であると考えられる。

・前回調査時にはミズナラのナラ枯れが確認されていたが、今回は新たなナラ枯れ被害木は見られず、現時点ではナラ枯れの発生は落ち着いているものと考えられる。

まとめ・考察

全体まとめ

- ・林相や湿原に大きな変化はなく、流路も豊富な水量が維持されており、安定した状況であることが確認された。
- ・前回調査で確認されたミズナラのナラ枯れ被害についても、今回新たなものは見られずナラ枯れの発生は落ち着いているものと見受けられた。
- ・ただし秋田県内においてはナラ枯れ被害が継続しているため今後の注視が必要である。

評価を踏まえた今後の対応等

項目	結果・対応等
今回の評価を踏まえた 今後の対応について	・定期的な巡視を継続 ・5年後にモニタリングを実施
保護・管理及び利用に関する事項 （保護林管理方針書）	・原則として自然の推移にゆだねることを基本とし、施業等を必要とする場合には、管理経営の指針に基づき行うこととする。 ・秋田県内においてはナラ枯れ被害が継続しており、増加傾向にあることから、ナラ枯れ被害の発生を注視した保護・管理を継続していく。